

社会を生き抜く力をはぐくむ英語科学習活動の創造 —Reading based インタラクションと再構成活動を位置づけた 単元構成の工夫を通して—

Creating English Learning Activities to Nurture Students' Ability for
Living Independently in Society
— A Study Utilizing the Methods and Procedures for Reading-Based Activities Centered
on In-Class Interaction and Reconstruction —

鳥越英樹

Hideki TORIGOE

(福岡教育大学附属

久留米中学校)

江崎由美江

Yumie ESAKI

(福岡教育大学附属

久留米中学校)

江頭理江

Rie EGASHIRA

(福岡教育大学)

(平成25年9月30日受理)

要 約

グローバル社会が急速に進む社会情勢の中で、身のまわりに溢れる様々な情報の中から、自らの力で必要なものを取捨選択し、それらを上手に取り込みながら、自己の考えを発信し、異文化を背景にもつ人々と相互理解を図ることができる能力や態度を養うことが不可欠となってきた。

そんな中、今日の英語科学習指導において、「聞く」「話す」「読む」「書く」という4つの技能を統合的に扱いながら、総合的にコミュニケーション能力を高めることが求められている。

そこで、本研究は、Reading教材をもとに、子どもの“気づき”をいかにして生み、その“気づき”の視点をもって、必要な情報を取捨選択しながら、自らの課題を主体的に解決していくことができるような学習活動を実践的に究明したものである。

キーワード: Reading based, インタラクション, 気づき

1 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

情報化社会の進歩が加速し続ける中、あらゆる情報があふれ、その受信、発信を誰もがすることができるようになり、価値観も多様化していると同時に、環境問題など地球規模で解決していかなければならない問題が山積している。文部科学省策定の「英語が使える日本人の育成のための行動計画」では、グローバル化とIT革命の進展を背景に、「英語は、母語の異なる人々の間をつなぐ国際的共通語として最も中心的な役割を果たしており、子どもたちが21世紀を生き抜くためには、国際的共通語としての英語のコミュニケーション能力を身に付けることが不可欠である」と英語教育の重要性を述べている。

また平成24年度の福岡県学力実態調査の調査結果報告書によると、活用問題において平均正答率は期待正答率より9.5ポイントも下回っている。特に、英文を聞いたり読んだりして必要な情報を取り出したり、場面に応じて自分の考えや気持ちを、つながりのある

英文で表現することができていないということが課題として示されている。これらのことから、英語科では、様々な媒体を通して英語を「聞いたり」「読んだり」して単に情報を得るだけではなく、その情報に関して自らの体験や考えなどと照らし合わせたり、さらに既習の知識・技能と結びつけたりするなどしながら「書いたり」「話したり」することにつなげていく力を育成することが必要であると考えられる。

(2) これまでの英語学習における課題から

英語の学習において子どもたちは、言語材料を学習しその意味、形式、はたらきなどは十分理解できていると思っていても、実際に異文化の背景をもつ人とのコミュニケーションの場面では使えないという状況が往々にしてある。また、読んだり、聞いたりした内容を理解し、それをもとに自分では伝えたい内容を論理的に書いて整理し、もうすでに伝えられると思っているが、実際のコミュニケーションの場面では、なかなか相手に伝わらないもどかしさや不足感を感じるこ

があり、後でコミュニケーションの場面を振り返ってみて、「あんな風にすればよかった」「こんな風に言えばよかった」など思うこともたくさんある。

そこで、子どもが異文化の背景をもつ人とのコミュニケーションの場面（特に対話など即時性が必要な場面）で感じた“伝わらないもどかしさ”や“不足感”の原因を解消するため、課題に対する子ども自身の気づきをいかにして生み、その視点から自己の課題を見だし、課題に主体的にたらしかけ解決していくことができるようになることが必要であると考えている。

2 主題の意味

本研究において、英語科における「社会を生き抜く力」とは、多様な文化的背景をもつ人との関わりの中で、相手の意図や考えを的確に理解し、自分にとって必要な情報を取捨選択しながら取り入れ、自分が伝えたいことを、取り入れた情報を活用して、理由や根拠とともに、論理的に相手に説明したり、反論したり、相手を説得したりしながら相互理解を図ることができる能力や心情、態度（コミュニケーション能力）と考える。

「コミュニケーション能力」とは、多様な文化的背景をもつ2人以上の人間のメッセージのやり取りの中で、英語で「読んだり」「聞いたり」した内容を正しく理解し、得た情報の中から、自分に必要な情報を取捨選択したり、自らの体験や考えなどと照らし合わせたり、既習の知識・技能と結びつけるなどして情報についての理解を深め、伝えたい内容を、相手や場に応じた適切な表現を用いて「書いたり」「話したり」して、相互理解を図ることができるようになる能力や心情、態度のことである。

国際化、情報化、科学技術の発展の中で、英語を使う人口は20億人と言われ、その内、英語を母語とする人の数は約4億人で、残りの16億人が、英語を非母国語として使っているという現状があり、文化的多様性からくる多言語世界をつくり出し、独自の英語も生まれている。このことから、我が国でこれまで目指してきた、英語母語話者とのコミュニケーションを目的としたコミュニケーション能力の育成から、その範囲を異言語話者間とのコミュニケーションまで広げたコミュニケーション能力の育成へとシフトしていく必要があると考える。

3 副題について

(1) 副題の意味

「Reading」とは、コミュニケーションを図る上で有益となる情報を英文で読むことである。

「Reading based」とは、異文化の背景をもつ人とのよりよいコミュニケーションを目指して、子どもが自己の課題に気づくことができる教師とのインタラクティブを展開するために、コミュニケーションを図る

上で有益な情報を含む英文を読むことを基軸とすることを指す。

「Reading based インタラクティブ」とは、コミュニケーションを図る上で有益な情報を含む英文を読んだ後に、Reading 教材の中の、語彙、表現、内容等についての教師と子どもとのやりとりのことを指す。一次においては題材に対する子どもがもつ背景知識の活性化を図り、活動への関心を高め、二次においては自己のコミュニケーションに対する課題を分析するための視点をもつことができるようにすることをねらいとする。

「再構成活動」とは、Reading based インタラクティブ②でもった視点をもとに、モデル文や友だちの考えと自分の考えを比較し、自分の課題や友達の考えに含まれるよさを明らかにし、相手にとってよりわかりやすい内容や表現、伝え方についての理解を深め、伝えたい内容を付加、修正したり、作り直したりする活動

表1 Reading based インタラクティブのねらいと学習活動の内容

活動	ねらい	活動内容
Reading based インタラクティブ①（一次）	活動の内容に関する背景知識（スキーマ）の活性化を図ったり、新しい語彙や表現、言語材料について知り、活動への関心を高めることができるようにする。	Reading ①の中から、新出の語彙、表現、内容等について、教師と子どもとが英語でやりとりを行う。
Reading based インタラクティブ②（二次）	子どもが、コミュニケーション活動①で感じた、伝わらないもどかしさや不足感の原因となる課題を解決するための視点をもつことができるようにする。	Reading ②の中から、コミュニケーション①における子どもの課題につながる語彙、表現、内容等について教師と子どもとのやりとりを行う。

表2 本研究における再構成活動のねらいと学習活動の内容

活動	ねらい	活動内容
課題分析	自分の課題や友だちの考えに含まれるよさに気づくことができるようにする。	教師とのインタラクティブでもった視点をもとに、モデルや友だちの考えと自分の考えを比較する。
リフレクション	相手にとってよりわかりやすい内容や表現、伝え方について理解することができるようにする。	ペアまたはグループで考えた解決策や、見出したよさについて全体で共有する。
再構成	読んだり聞いたりして得た知識や情報をもとに伝えたい内容を構築することができるようにする。	見出した課題の解決策やよさをもとに自分の考えや情報を付加、修正したり、作り直したりする。

を指す。具体的には以下に示す通りである。

Reading based インタラクションと再構成活動を位置づけた単元構成の工夫を通して」とは、第二次と第三次で類似しているが異なった課題のコミュニケーション活動を設定し、第二次において課題解決に向けた言語材料を学習し、それを活用したコミュニケーション活動と Reading based インタラクション、再構成活動を行い、第三次で、第二次の中で獲得した言語材料、内容、伝え方を活用して、発展的な課題を解

決していく学習過程のことである。具体的には、第一次では、Reading ①の中から、Reading based インタラクション①を行うことで、自己の課題を設定する。また第二次では、コミュニケーション活動①の中で感じた自身の不足点などの課題を Reading based インタラクション②で明らかにし、その後の再構成活動を通して、課題解決を図ることで、三次において、異文化の背景をもつ人とのコミュニケーションがよりよいものになると考える。

(2) 学習過程のモデル

表3 Reading based インタラクションと再構成活動を位置づけた学習過程のモデル

段階	第一次	第二次	第三次
ねらい	活動の内容に関する背景知識（スキーマ）の活性化を図り、新しい語彙や言語材料を知り活動への関心を高め、内容や言語材料の視点で課題を設定することができるようにする。	英語で聞いたり読んだりして得た情報の中から必要なものを取捨選択したり、既習の知識・技能と結びつけながら、自らの体験や考えなどと照らし合わせたりして、言語材料や、獲得した情報についての理解を深め、自分が伝えたい内容を構築することができるようにする。	新しい言語材料や獲得した情報を場面や相手に応じて適切に用いながら、コミュニケーションを行い、相互理解を図ることができるようにする。
子どもの活動	1 Reading ① Reading based インタラクション① 2 課題設定	3 言語材料の学習 4 モデル Reading, Writing 5 プラクティス（個人、ペア、グループ） 6 JTE（ALT）とのコミュニケーション活動① 7 Reading ② Reading based インタラクション② 8 再構成活動 〔(1) 課題分析 (2) リフレクション (3) 再構成〕	9 Writing 10 プラクティス（個人、ペア、グループ） 11 ALT, GT とのコミュニケーション活動 12 活動の振り返り（VTR 視聴）とまとめ
教師の援助	○トピックの紹介 ○背景知識の活性化を図ったり、言語材料への気づきを促すモデルの提示 ○活動で必要な既習事項を確認し、課題を明らかにするための対話活動や交流活動の設定	○言語材料の学習の設定 ○表現内容を獲得するためのモデル Reading と Writing の設定 ○自分の考えや情報を相手に伝えることができるようにするための個人やペア、グループでの練習の設定 ○コミュニケーションにおける課題に気づくことができるようにするための JTE とのやりとりの設定 ○文法面、談話的、方略的な面、さらに伝えたい内容の課題解決を図ることができるようにするための再構成活動の設定	○新たな場面におけるコミュニケーションの場の設定 ○VTR を使って振り返りとまとめの場面の設定

4 めざす子ども像

- 必要な情報について主体的に理解しようとしたり、自分の考えや伝えたい内容を積極的に伝えようとしながらコミュニケーションを図ろうとする子ども
- 読んだり、聞いたりして、必要な情報を取捨選択し、今までの体験などと結びつけて、自分の考えや伝えたい内容を適切に書いたり、話したりして表現することができる子ども
- 読んだり、聞いたりして得た情報や、話し手や書き手の意向を正しく理解することができる子ども
- 言語材料の言語形式、意味内容、言語機能を理解することができ、その背景にある異文化を理解することができる子ども

5 研究の仮説

英語科の学習活動において、Reading based インタラクションと再構成活動を位置づけた単元構成の工夫を行えば、子どもは、新しい言語材料や、テキストの内容を正しく理解し、情報の中から必要なものを取捨選択したり、既習の知識・技能と結びつけながら、自らの体験や考えなどと照らし合わせたりして、伝えたい内容を構築し、獲得した情報についての理解を深め、獲得した情報を場面に応じて適切に用いながら、コミュニケーションを行い、相互理解を図ることができるようになるので、コミュニケーション能力を高めることができるであろう。

6 研究の実際

(1) 活動主題

「オリジナル絵本をつくり紹介しよう。」

(2) 単元構想

誰しもが幼少のころ、絵本の読み聞かせを聞いたり、絵本を手にとったりした経験がある。現在では大人をターゲットにした芸術性の高いものも出版されている。絵本の特徴として、絵で内容が推測できる上に、音の聞きやすさが挙げられ、言葉とイメージ（視覚から得た情景）を関連付けて、言葉の意味を学習することができる。また、絵本を誰に向けてつくるのかということを考えることで、相手意識をもち、さらには言語材料などが文脈の中でどんなはたらきをしているのかなどを理解し、実際に使いながら絵本をつくったり、紹介したりしてコミュニケーションを行い、相互理解を図ることができるようになる。そこで、「オリジナル絵本をつくり紹介しよう。」という活動を活動主題とし、英語で絵本をつくったり、読み聞かせをしたりして紹介する活動を設定する。子どもは、提示された資料（ALTからのビデオレターや既成の絵本、JTEとの絵本の内容に関するやりとり）を聞いたり、読んだりして、一般動詞や複数形、接続詞などの言語材料や、絵本独特の表現法（同じ言葉の繰り返しなど）などの情報を獲得し、その中から自分にとって必要な情報を取捨選択することができる。また、その情報と、これまでの自分自身の経験や既習の知識などと結びつけたりしながら、相手にとってよりわかりやすい内容でオリジナルの絵本をつくり、さらに、よりわかりやすい伝え方について理解を深め、紹介することができる。言語材料としては、一般動詞、複数形、接続詞について学習する。これらを学習することで、これまでのYesかNoかでのやりとりから、人やものの行為や動作についての具体的なやりとりを行うことができるようになり、さらに接続詞のはたらきについて理解することができるようになる。と考える。

(3) 本単元におけるねらいと工夫点

そこで本活動では、一般動詞や複数形、接続詞の意味や形式、はらたきと、英語絵本の中で、相手によりわかりやすく伝えるための内容や表現について理解し、読んだり聞いたりして得た情報や知識をもとに伝えたい内容を構築し、それらを適切に用いながらコミュニケーションを行って相互理解を図ることができるようにすることをねらいとする。そのために次のような工夫を行う。

- ・新しい言語材料のはたらきを文脈の中で理解することができるようにするため言語材料を含む絵本を使った学習を行う。
- ・学習した言語材料の文脈の中で使うことができるようにするため、絵に沿って自分のオリジナルの内容

について考える活動を設定する。

- ・自分の不足点に気づくことができるように、JTEに絵本の読み聞かせを行う場を設定する。
- ・自己の課題を見いだすための視点をもつことができるように、JTEとの英語でのやりとりを行う場を設定する。
- ・自己の課題に気づくことができるように、元話や友だちが作った作品と自分が作ったものと比較する場を設定する。
- ・自己の課題を認識し、相手にとってよりわかりやすい情報や伝え方にすることができるように、比較活動により見出した課題や友だちの作品に含まれるよさを交流し、共通する点や、新たに見出した課題について明らかにし、解決策について考える場を設定する。
- ・課題や解決策を共有することができるようにするため、明らかになった課題とその解決策について全体で交流する場を設定する。
- ・ALTを納得させられるように、よりよい内容や伝え方ができるように、自分が作成した絵本を付加、修正、または作り直しを行い、ペアで練習を行い、JTEに伝える活動を設定する。

(4) 単元の仮説

「オリジナル絵本をつくり紹介しよう」という言語活動において、Reading based インタラクションと再構成活動を位置づけた単元構成の工夫を行えば、子どもは、一般動詞や複数形、接続詞の意味や形式、はらたきと、英語絵本の中で、相手によりわかりやすく伝えるための内容や表現、伝え方について理解し、読んだり聞いたりして得た情報や知識をもとに伝えたい内容を構築し、それらを適切に用いながらコミュニケーションを行い相互理解を図ることができるので、コミュニケーション能力を高めることができるであろう。

(5) 指導の実際

① 第一次

第一次では、絵本を読む活動や題材に興味、関心をもち、絵本を聞いたり読んだりして、新しい情報に気づき、内容や言語材料の視点で課題を設定することができるようにすることをねらいとした。

まずALTからのビデオレター（アイルランドにいる甥の誕生日にオリジナルの絵本を作って送ってあげたいので一緒に作ってこないかという内容）を視聴する。そこで実際に英語の絵本「Brown bear Brown bear what do you see?」を読んだり、聞いたりして、その内容についてメモを取り、ペアで内容について交流を行った。その後、絵本の題材や新しい語彙や表現、言語材料に気づくことができるように、その絵本に関する教師との英語でのやりとり（Reading based イン

タラクション①)を行った。さらに絵本「Let's play: Leo Lionni 作」の絵(5コマ)を使って実際にオリジナルのストーリー【資料1】づくりを行った。このことで子どもは、絵本をつくるという活動に興味・関心をもち、絵本を読む人、つまり相手意識をもって絵本をつくらなければいけないということや、本単元で学習する動作を表す動詞(一般動詞)について学習をしなければいけないという課題【資料2】をもつことができた。

②第二次

第二次では、一般動詞や複数形、接続詞(but, and,

資料1 生徒が作成したオリジナルストーリー

	Good morning!	
	Is this a cheese or book?	
	I'm hungry.	
	Oh! I like cheese.	
	That is like a cheese. ... Good night. No. That is moon. Oh, beautiful.	

資料2 一次で設定した課題

<p>生徒Aの課題</p> <p>今日の学習を通してどんな課題をもちましたか?</p> <p>重要な単語や大切な所は書けるけど、それをつなげるのができてなかった。一般動詞ができていなかった。なので、文としておかしい、音がかたまっていない。次は、単語をつなげる連続の部分や一般動詞を理解して、みんなのわかる文をつくりたい。</p>
<p>生徒Bの課題</p> <p>今日の学習を通してどんな課題をもちましたか?</p> <p>本を読む対象がどんな人かを考えた上で英語でストーリーをつくるのは難しいと思いました。読み手になったつもりで話をつくりたいかと思いましたが、自分の知っている表現でつくるのが大事だと思いました。</p>

then)の意味や形式、はらたきと、英語絵本の中で、相手によりわかりやすく伝えるための内容や表現、伝え方について理解し、読んだり聞いたりして得た情報や知識をもとに伝えたい内容を構築することができるようにすることをねらいとした。

そこでまず、新しい言語材料のはたらきを文脈の中で理解し、使うことができるようにするため一般動詞や複数形、接続詞などの言語材料の学習を行った後、学習した言語材料が自然な形で使うことができる絵本「The very hungry caterpillar (腹ぺこあおむし)」の絵に沿って自分のオリジナルのストーリーを考える活動を行った。その後、自分の作成したオリジナルのストーリーを、ALTに伝えるが、ALTの反応が予想と違っており、上手く伝わっていないことを実感する。そこで伝わらなかった原因をさぐるため、「The hungry caterpillar (腹ぺこあおむし)」のオリジナルのストーリーを読み、その内容や表現、伝え方などについてJTEとの英語でのやりとり(Reading based インタラクション②)【資料3】【写真1】を行った。

またそこでもった視点をもとに、元話や友だちが作った作品と自分が考えたものと比較し、さらにペアで互いの作品を読み、共通する課題を明らかにし、課題解決策について考えたり(課題分析)、友だちの作品がもつよさを共有することを行った。そして、明らかになった課題とその解決策、自分や友だちの作品がもつよさを全体で交流を行った(リフレクション)。最後に、自分が作成した絵本の内容や表現、伝え方な

資料3 Reading based インタラクションの一部

Reading based インタラクション②		
	Teacher	Student
1	Please read the title. What is the title?	The very hungry caterpillar.
	Right. I'm very hungry. How about you?	Me too.
	What's the Japanese title of this story?	It's はらぺこ青虫
	Right. We have nine pictures. So what day is the first scene?	It's Sunday.
	What do you start to do on Sunday?	I start to look for some food.
	Oh, you look for some food on Sunday.	Yes.
2	And let's move on next scene. Scene 2. What day is the next day of Sunday?	It's Monday.
	Yes. On Monday. We use "on". On Monday. On Thursday. On Friday. On Saturday. So anyway what do you do on Monday?	I eat one apple.
	Oh, you eat two apples?	No. One apple.
	Sorry. You eat one apple. Is that big apple for you?	Yes, it is.
	Are you full?	No, I'm not.
	Oh, you are not full. So you said "but I'm still hungry." You eat an big apple. but you are not full.	Yes.



写真1 Reading based インタラクションの様子



写真2 自分のストーリーと友だちのストーリーとの比較を行っている様子

どについて共有した課題やよさをもとに、自分のストーリーを付加、修正、または作り直し（再構成）、ペアで練習を行った。子どもはまずReading based インタラクション②を行うことで、自己の課題や価値に気づくための視点、つまり一般動詞とbe動詞を混同して使っていたり、複数形を正しく使えていないという文法的な間違いや、話を方向付けるためのディスコースマーカとしての役割を果たす接続詞を効果的に使えていないということ、相手によりわかりやすく絵本の内容を伝えるための伝え方（例：同じ表現を繰り返す）などの視点をもつことができた。またそこで気づいた視点をもってモデルや友だちのストーリーと比較することで【写真2】、自分が考えた内容の課題やよさを明確にすることができた。さらにその課題やよさを全体で共有することで自分が気づいていない課題やよさも同時に明確にすることができ、自分自身の課題と照らし合わせてストーリーの付加・修正を行った。

資料4 モデル文との比較から明らかになった課題

モデル文や友だちのつくった英文との比較を通して気づいた自分の課題

- 場面最後に "But I'm still hungry" を入れた方がもっと詳しく状態が伝わったと思う
- "But" や "And" を入れた方が場面がつながって聞かやすいと思う

接続詞の必要性

資料5 課題分析から見いだした自分や友だちの作品のよさ

自分や友だちの作品のよさ

自分のよさ

- But and then ストーリーがながい
- 伝え方 big, sweet その状態を詳しく説明する
- 文法 I'm eat an apple. => I eat an apple. I'm stomachache => I have stomachache
- 内容 簡単な構成にお互いの話を

友だちのよさ

- 習得した言語材料を正しく使っているか
- This oo といっていて、いいと思った。
- strawberries

接続詞を使うよさ

相手意識をもつことの必要性

③第三次

第三次では、二次までに獲得した知識、つまり絵本を相手意識をもって、よりわかりやすくする方法を活かして、それぞれがオリジナルの絵本を制作することを行った。子どもはまずオリジナルのストーリーと絵コンテを描き、絵本台紙を使って制作した。また、できあがったオリジナルの作品をそれぞれ ALT に紹介し、作品に関する ALT からの質問に答える場面を設けた。その後 ALT が審査を行い、優秀作品を選出、表彰し、その作品についてはアイルランドに住む ALT の甥に誕生日のプレゼントとして郵送することを行った。最後に活動全体を振り返ったことで、今後さらに類似した場面や新たな場面においても、相手意識をもってコミュニケーションを図ることや、be 動詞と一般動詞を使い分けたり、接続詞を用いてまとまりのある英文を作成したり、相手にわかりやすく伝えたりするということをまとめることができていた。

(6) 本時研究授業における仮説検証と考察

本時研究授業において次のような仮説検証を行った。

①本時のねらい

英語絵本の中で、相手によりわかりやすく伝えるための内容や表現、伝え方について気づき、理解することができるようになる。

②本時仮説

相手によりわかりやすく伝える絵本の内容を見直す活動において、絵本の元話をもとに語彙、表現、内容に関する教師（JTE）とのやりとりや、元話や友だち

の作った内容と自分が作った内容を比較、分析し、ペアや全体で交流する活動を設定すれば、子どもは、絵本の内容を考える中での自分の課題や、自分や友だちの内容に含まれたよさを見出すことができるので、相手によりわかりやすく伝えるための内容や表現、伝え方について理解することができるようになるであろう。

③仮説検証

【検証Ⅰ】

絵本の元話をもとに語彙、表現、内容に関する教師（JTE）とのやりとり（Reading based インタラクション②）を行ったことは、課題分析に向けた視点（自分の課題やよさを見出すための視点）をもつことに有効であったか。

モデル文シートの子どものマーキング箇所より判断し、次の ABC の三段階で評価を行った。

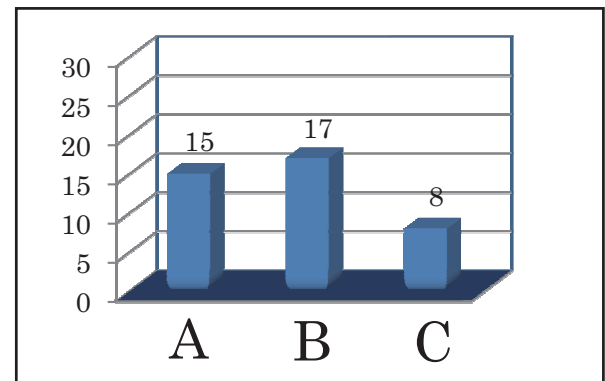
- A：モデル文の中で、以下の条件を満たす箇所にマーキングをしている。
 ※以下の内容から（1）（2）（3）（4）のうち3つ以上の項目について。
- B：モデル文の中で、以下の条件を満たす箇所にマーキングしている。
 ※以下の内容から（1）（2）（3）（4）のうちいずれか2つの項目について。
- C：A、B 以外

内容	マーキング箇所
(1) Be 動詞と一般動詞の使い分け	<ul style="list-style-type: none"> ・ I start ・ I eat ・ I build (make) ・ I sleep ・ I build
(2) 複数形	<ul style="list-style-type: none"> ・ pears ・ strawberries ・ foods ・ plums ・ oranges
(3) 同じ表現を繰り返し使う	繰り返しの表現 ・ On 曜日→（何曜日に） ・ I eat ～, but I am still hungry.
(4) 接続詞を使ってわかりやすく伝える方法	接続詞（and） 接続詞（but） 接続詞（then）

検証結果から、絵本の元話をもとに語彙、表現、内容に関する教師（JTE）とのやりとり（Reading based インタラクション②）を行ったことは、課題分析に向けた視点をもつことに概ね有効であったと考える。

その内容としては、文法事項、特に一般動詞と be 動詞を混同して使用していた子どもや、複数形が正し

資料6 課題分析に向けた視点をもつことができたか



く使えていなかった子どもについては自分が間違った項目に該当する箇所に 100% マーキングをすることができていた。また接続詞の使用に気づいた子どもが 28 名（40 人中）おり、子どもは、次の課題分析に向けての視点をもつことができたと考えられる。

【検証Ⅱ】

モデル文や友だちの作った内容と自分が作った内容を比較、分析し、全体交流を行ったことは、絵本の内容を考える中での自分の課題や、自分や友だちの内容に含まれたよさを見だし、理解することができることに有効であったか。

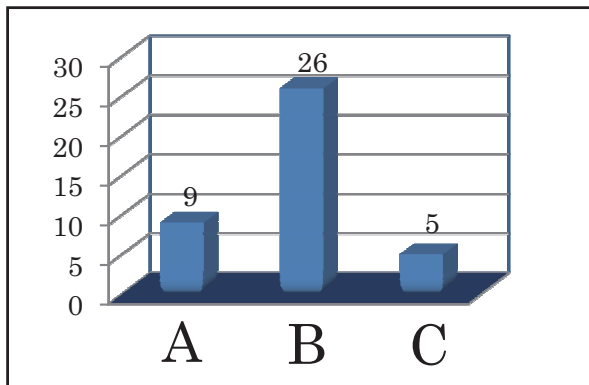
学習プリントの「自分の課題」と「自分の作品のよさ」、「友だちの作品のよさ」の欄の記述より判断し次の三段階で評価を行った。

- A：言語材料、語彙・表現、伝え方に関する以下の3つのうち2つ以上を、自己の課題または自分が作った作品に含まれるよさ、または、友だちが作った作品に含まれるよさの中で挙げることができる。
- B：言語材料、語彙・表現、伝え方に関する以下の3つのうち1つ、自己の課題または自分が作った作品に含まれるよさの中で挙げることができる。
- C：A、B 以外

- ・ be 動詞と一般動詞の使いわけ
- ・ 複数形を正しく使えているか
- ・ 接続詞の使用
- ・ 相手意識をもった伝え方、表現

検証結果から、モデル文や友だちの作った内容と自分が作った内容を比較、分析し、全体交流を行ったことは、絵本の内容を考える中での自分の課題や、自分や友だちの内容に含まれたよさを見だし、理解することができるようになるのに概ね有効であったと考える。これは直前に行った Reading based インタラク

資料7 自分の課題やよさを見いだし、理解することができたか



ションの中で、自分が作成したオリジナルのストーリーとのズレに気づき、改善の視点をもったことで、その中でできた枠を通してモデル文との比較を行い、課題を明確にすることができたと考ええる。さらに、モデルとの比較だけでは終わらず、友だちのストーリーとの比較を行うことで、友だちの課題（自己の課題と重なるもの）やよさも同時に見つけ、自己の課題、具体的な改善策をもつことができたと考ええる。しかし子どもの具体的な記述をもとに、検証の3つの項目をより細分化（より具体的に）して見取る必要があると考ええる。

7 全体考察

本研究においては、「読む」から「聞く」「書く」「話す」という活動に繋ぐ、いわゆる4技能統合学習の在り方の1つのパターンを模索することを最大のねらいとしている。子どもが自己の課題を主体的に解決していくことができるようになるためには、その入口としての“気づき”が大きな役割を担っていると考ええる。そこでReading教材をもとにした教師とのやりとりにおいて子どもの“気づき”をいかにして生み、その気づきによってもった視点をもとに、自身の課題や解決策を段階的に明確にしていくことを行った。子どもが学習した言語材料を使って伝えたい内容考えた後に、Reading based インタラクションを行ったことで、子どもは自分が作成した内容とモデルを重ね合わせながら、自身の課題の枠となるものを、教師とのやりとりの中で構築していくことができたと考ええる。また、そこでもった視点をもとに、モデルとの比較や友だちの作品との比較というように、二段階での比較活動を行ったことで、自己の課題や改善策が次第に明確にもつことができるようになったと考ええる。しかし、Reading based インタラクションに入る前の段階で、子どもに伝わらないもどかしさや不足感を生む手だてとしてALTとの不十分な対話の場面を設定することだけにとどまっていることが課題として挙げられる。またReading based インタラクションによって生む

“気づき”の内容によって、その方法や内容は様々であるので、やりとりの類型化などの工夫を図る必要があると考える。

参考文献

- 「中学校学習指導要領解説 外国語編」東洋出版社
 卯城祐司「英語リーディングの科学」2013 研究社
 門田修平・野呂忠司・氏木道人「英語リーディング指導ハンドブック」2010 大修館
 P.A リチャード・アマト「英語教育のスタイル」1993 研究社出版
 Leo Lionni「Let's play」Knopf
 Bill Martin jr/Eric Carle「Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?」Henry Holt
 Eric Carle「THE VERY HUNGRY CATERPILLAR」Philomel